

隅田川（東京都）

私が住んでいるのは港区高輪、忠臣蔵の赤穂浪士で有名な泉岳寺の裏手あたりである。家のまわりに川はなく、以前住んでいた北品川のあたりも川はない。今回のレポートで初めて気が付いたのだが、私は人生で日常的に川とふれあったことがなかった。学校の修学旅行で長野の川辺で飯盒炊爨をしたり、京都に旅行に行って川くだりをしたりと、川を体験する機会は本当にたまにしかなかった。



私の家から比較的近い川は隅田川だ。浅草にあるので泉岳寺駅から都営浅草線一本で行ける。私と隅田川とのかかわりは、東武浅草線と水上バスにある。小さいころ浅草に遊びに行った帰りに隅田川から出る水上バスに乗るのがいつもの習慣だったのだ。また、栃木や会津のほうに旅行に行く際に東武浅草線から少しの間隅田川と桜が見えるのだが、晴れているととてもきれいなので電車に乗るたびに楽しみにしている。隅田川で川遊びをしたことはないが、この川は私にとって遊びに行くときに見える、見る遊びの一つのようなものだと思う。両親に2、30年前はどんな様子だったか聞いてみると、二人とも「何も変わってない、ずっとあのままだよ。戦後までさかのぼらないと変化はなにもない」と言っていた。浅草には何度も行っていたのに隅田川をゆっくりじっくり見たことはなく、どんな姿かまったく意識していなかったということにも、今回初めて気が付いた。



上の写真は、吾妻橋から見た隅田川である。川を見たときの第一印象は、「想像していたよりもずっときれい」だった。とても大きくて、私がイメージしていたドロドロの川とは

まったく正反対、その姿は生き生きしているように感じた。川幅は縦も横もとても広く、かもめが上空を飛んでいた。鳥がいるということは環境は悪くないのではないだろうか。そして、人と親しく関わりあっている川であるということも感じた。多くの人が川を眺めていたからだ。隅田川にはたくさんの橋がかかっているの、多くの人が立ち止まって川をみおろしていたし、川辺の遊歩道のようなところでは川を見ながら座ってご飯をたべているひともいれば、ただ川を眺めている人もいた。吾妻橋のすぐ横には水上バス乗り場があるので、その周辺はたくさんの人でにぎわっていたのだが、お正月で人があふれている浅草で他の場所はガヤガヤしているのに、川辺だけは非常に静かだったのがとても印象的だった。私もしばらく川の水を眺めていると、なんとなく気持ちが落ち着いていくのを感じ、皆同じような感覚で静かだったのだろうかと思議な気持ちだった。

隅田川の公式ホームページはなかったが、浅草について書かれたホームページに隅田川のことを詳しくのっているのを見つけた。まず川の名前について。これは地域、時代によって様々な名前があったようだが古くからは「宮古川」、「住田川」という名で、「すみ」という字にも澄や墨など、いくつかの字があてはめられていた。隅田川は生活用水、農業用水、人や物資の輸送手段として人々と関わっていて、江戸幕府のころには河川での運送が発展し、運送業や旅客業がさかんであった。また、観光地である浅草に近いので釣り船、花火見物、交通手段などとして親しまれ、人々の憩いの場でもあった。明治時代に入ると他の交通手段が発展したために船の利用が少なくなり、高度経済成長期には周辺に工場などが建てられ、家庭からの排水により水が汚染されていった。洪水もたびたび起こり、被害が出ていたようだ。高度経済成長期の汚染と悪臭のために、隅田川は人々からしばらく離れられていたのだが、昭和 30 年頃から浄化活動が始まり、現在では鳥などの動物たち、そして観光客も戻ってきている。そして、先ほども述べたとおり隅田川にはたくさんの橋が架けられている。千住大橋、吾妻橋、JR 総武鉄橋など全部で 25 橋もあり、最初の橋は徳川家康により 1594 年にかけて架けられた。それぞれ完成した年や長さが違い、歴史もそれぞれだ。たとえば、吾妻橋は 1774 年に雷門通りにつくられた隅田川最初の鉄橋であったが、床の部分は大地震で焼け落ちてしまった。もとは大川橋という名前だったのだが、明治 8 年に「吾妻橋」になったということだ。

台東区のホームページによると、昔はシラウオなども泳いでいたらしい。汚染によってそれらの生き物はいなくなってしまうが、浄化作戦のおかげで最近ではハゼやボラなどの魚がもどってきているそうだ。きれいになった隅田川を人々に実感してもらおうと区の主催で「隅田川ハゼ釣り」と水辺観察」が行われたり、願い事をこめた人形を川に流す「江戸流しびな」など様々なイベントが開かれ、家族連れなどでにぎわっている。

このようなホームページを見ると、隅田川が日ごろから人々に親しまれていることがわかり、また隅田川を広め、また保護していこうという人々の姿勢もみえてくる。今の隅田

川はとても良い環境にあるのではないだろうか。人々が興味をもって楽しみ和むことができる、そして保護活動もおこなわれている、多くの人から愛されている川だからだ。これからもこのような人と隅田川とのかかわりが続いていってほしいものだ。

とはいっても、一目見てきれいだと思った隅田川も、ひどく汚染されていた時期があったのだ。今予想以上にきれいだと感じるができるのは浄化活動のおかげであり、まだ少しずつ改善されていっている途中なので、本来の姿ではない。自然のままではないのだ。日々の人との和やかな交流も人間との関わりだが、水質汚染も人間の生活と川が深く関わっていたことによってもたらされたものであり、これも人と川との日々の交流によって生み出された問題である。隅田川を訪ねた数日後に、福知山県、豊岡市にあるコウノトリの郷を訪ね、職員の方がこうのとりについての解説をしてくださったのだが、日本のコウノトリの絶滅には大きく三つの要因があるそうだ。一つは、日本人が鉄砲という道具をつかうようになりコウノトリの乱獲が増えたこと。二つ目は第二次世界大戦中に油などをとるために、コウノトリが巣をつくる松の木が大量に伐採されたこと。三つ目が、農薬が使われるようになったために餌などを通してコウノトリの体が蝕まれて行ったことである。全て人間の行為によってできた要因だ。職員の方は、「コウノトリはまさに人間たちに翻弄されて絶滅したといっても過言ではない」とおっしゃっていた。これは川に起きたこととまさに同じことだ。川も人間に翻弄された末に汚染され、それが川だけでなく他の生物の命まで脅かすことになった。人間によって環境が壊されていることは誰もが知っていることだが、隅田川という一つの川の歴史を知った後でさらにコウノトリの事を聞き、このことを深く実感する機会となった。

今回、このレポートを書くにあたり人生ではじめて川について考え、川を見て感じるという目的を持って川のそばに立った。そして、その一つの川を通して、知っているけれども当然であるがゆえに自分の意識の表面に出てきていないことに気が付くことができた。中でも一番大きかったのが、人間と川の間には良い方向にも悪い方向にも発展し、どちらに行ってもその影響は大きいということだ。隅田川は人々の生活によって汚れ、その結果住んでいた生物はいなくなった。しかし今は、人間によって浄化され、生物たちも戻ってきて、人びとにも親しまれる川になっている。これからもどんだんきれいな川に戻り、人々と良い関係を結ぶ川でいてほしい。以前の私はそこに川があることは知っているけれど見ていないし意識していないという状態だった。これからは川をただ通り過ぎてしまうのではなく、見たり聞いたり、意識を向けながら歩こうとおもう。

台東区のホームページ

<http://www.city.taito.tokyo.jp>

浅草の歴史と観光

<http://www7.ocn.ne.jp/~sehayama/sumidariver.htm>